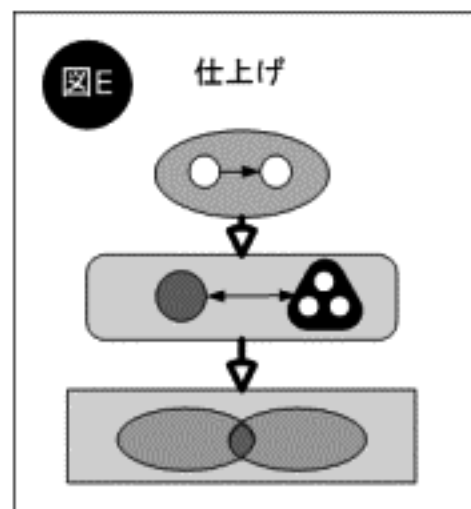
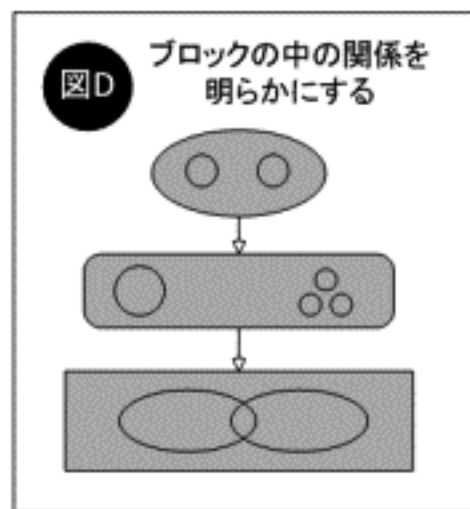
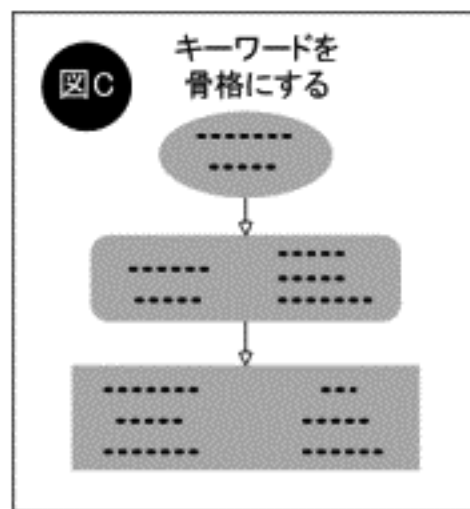
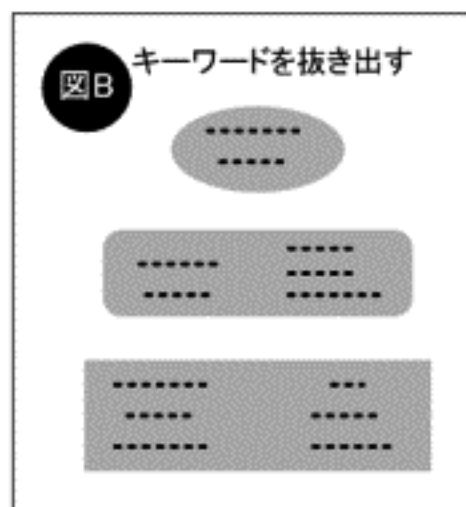
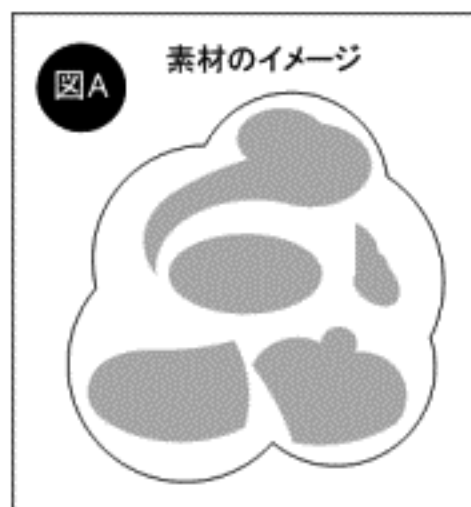


● 講義：図解技術（図解の描き方）

- ・マルと矢印で「構造と関係」を理解する
- ・矢印の使い方
- ・矢印の使い方 実例
- ・矢印の意味
- ・広がり感覚のパターン図
- ・広がり感覚のパターン図 実例
- ・縮まり感覚のパターン図 実例
- ・マルの使い方 レイアウトの方法
- ・マルの使い方 レイアウトの方法②
- ・図形の意味
- ・「新しい旅企画」（企画コンセプトの完成）
- ・文章vs図解「新商品の企画」
- ・文章を図解にする①
- ・文章を図解にする②
- ・文章を図解にする③
- ・順番を明らかにしよう
- ・タイトルは必ずつけよう
- ・コメントのつけ方

・図形と矢印で「構造と関係」を表す

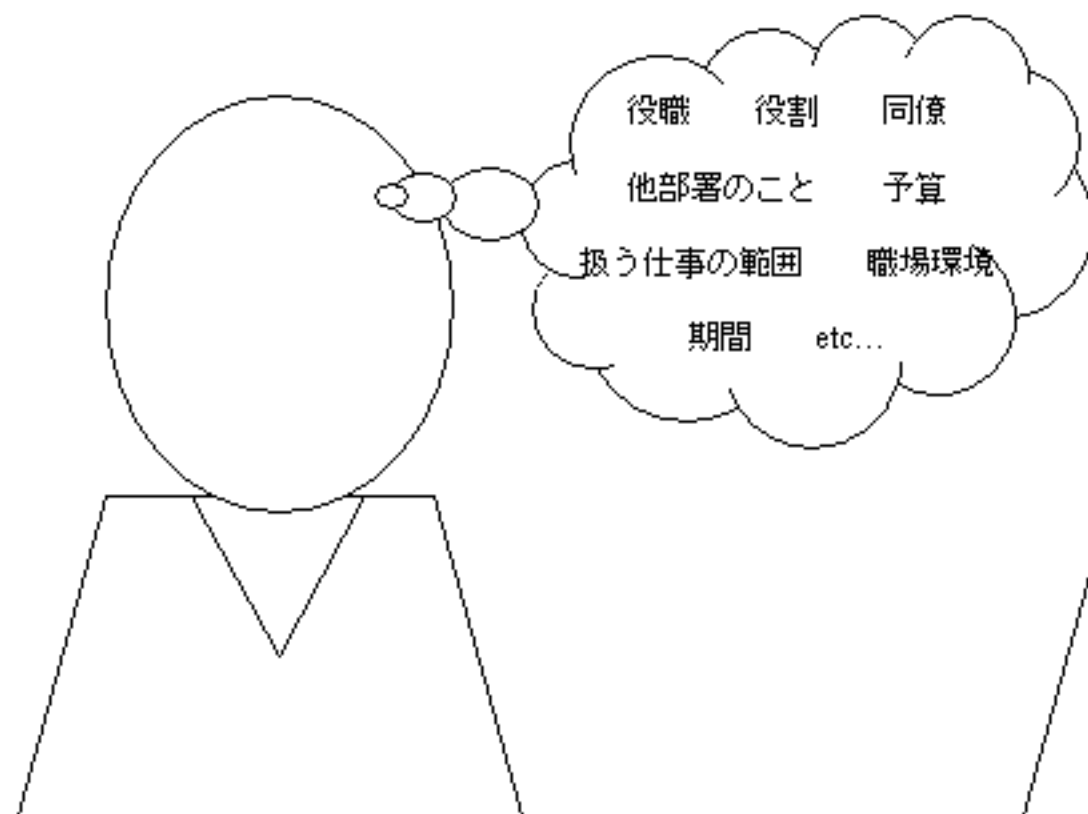


・図解の描き方① 情報の明示、収集

段階1:

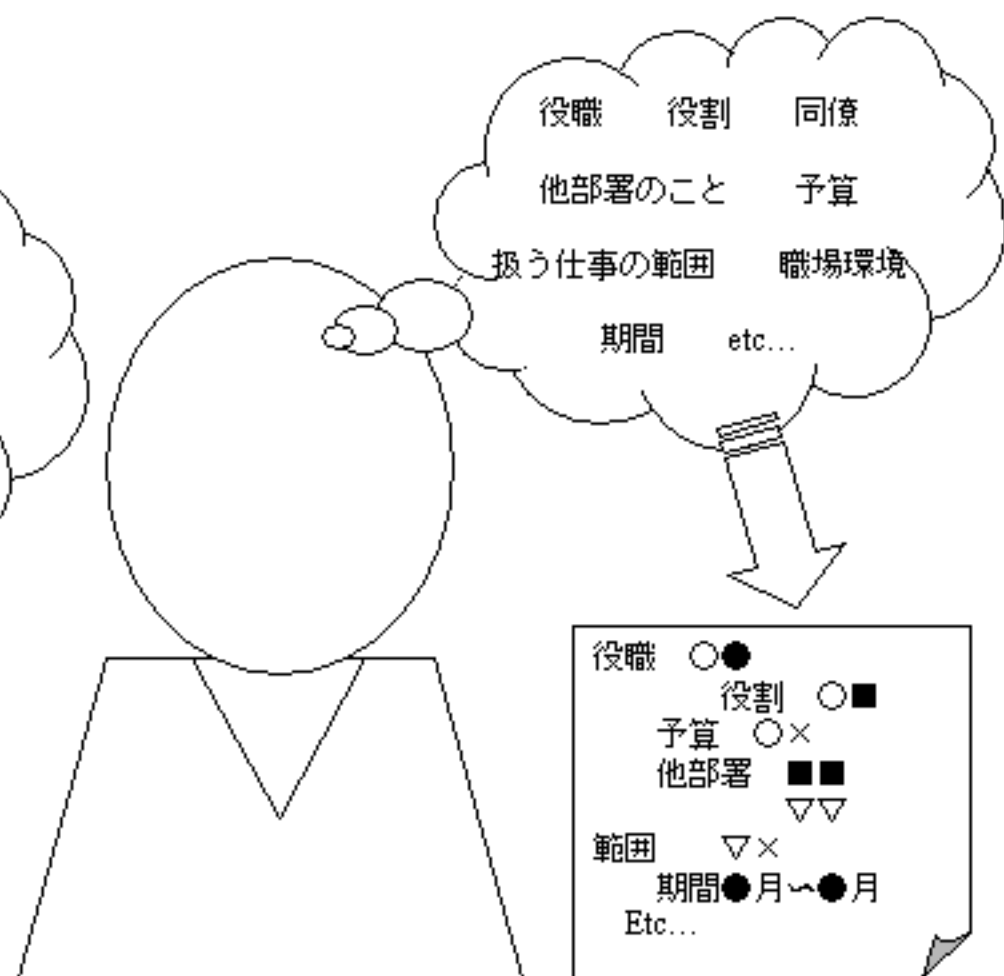
課題にあわせ、頭の中のキーワードを引き出す

課題:あなたの仕事を図解にしてください。



段階2:

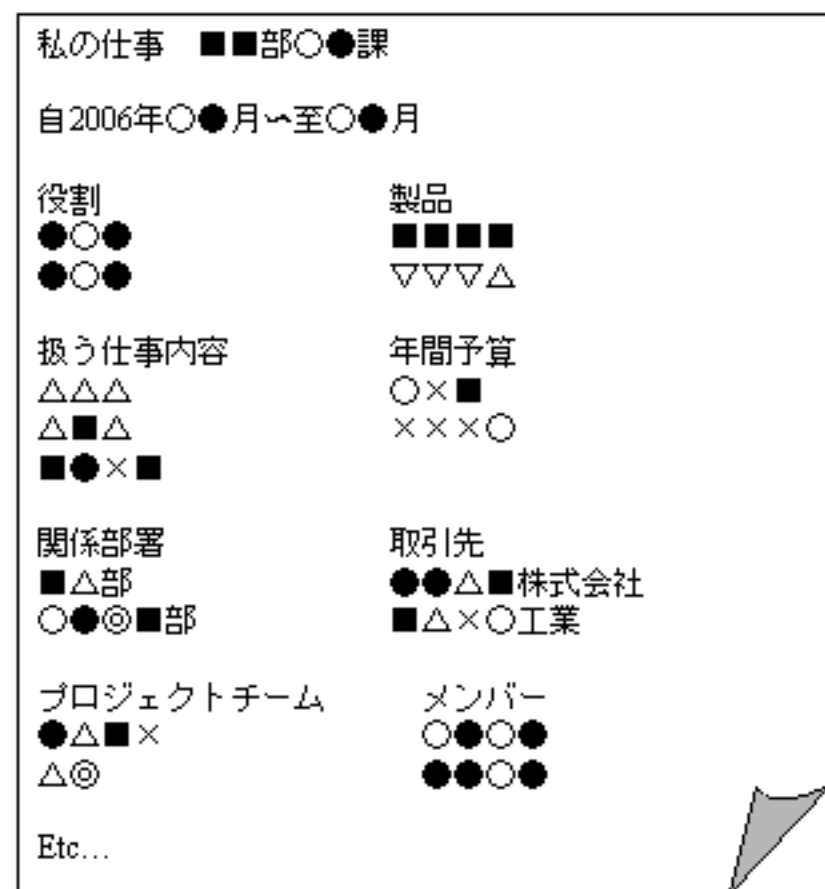
頭の中のキーワードを紙に全部書き出す



・図解の描き方② 情報の整理、分類

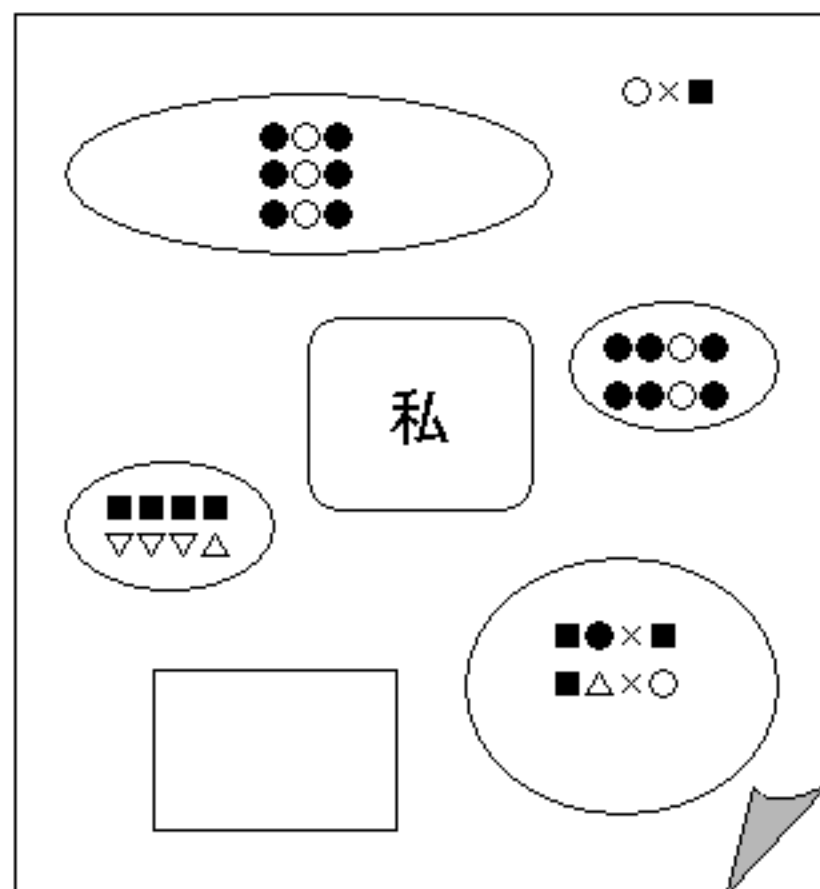
段階3:

紙の上のキーワードを整理、区分けする
(箇条書き段階)



段階4:

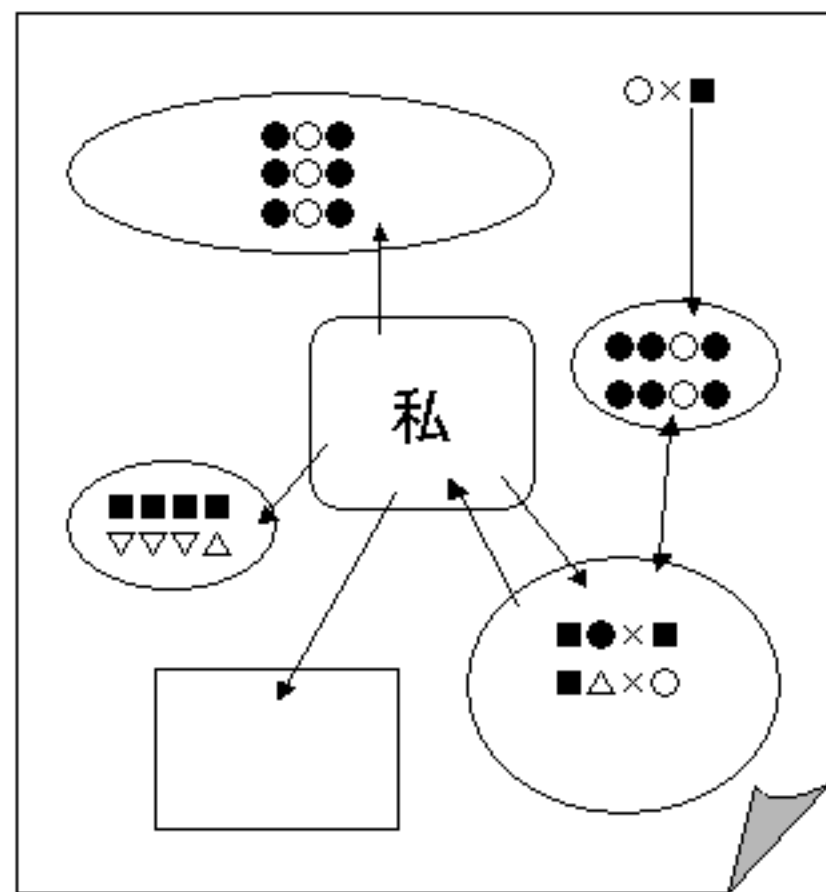
キーワードをマルで囲み、情報群を配置する



・図解の描き方③ 情報の相互関係をつくる

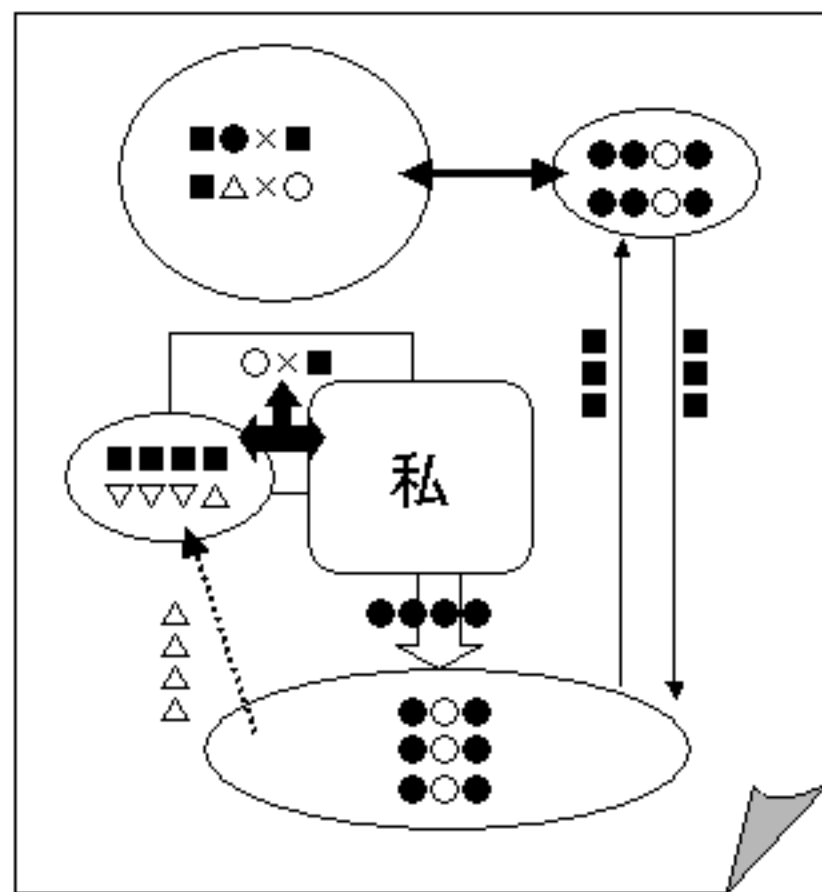
段階5:

マル同士を矢印でつなぎ、その関係を考える(矢印に記入してもよい)



段階6:

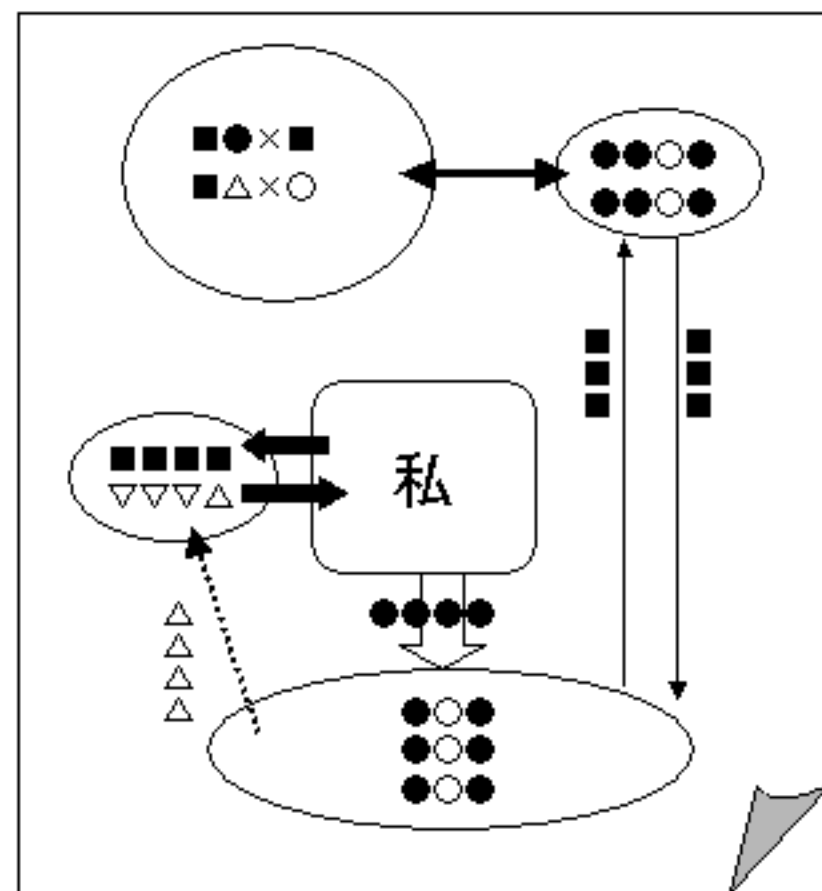
関係の強さや太さに応じて矢印に変化をつけたり、マル同士の位置を見直す



・図解の描き方④ 目的に応じて仕上げる

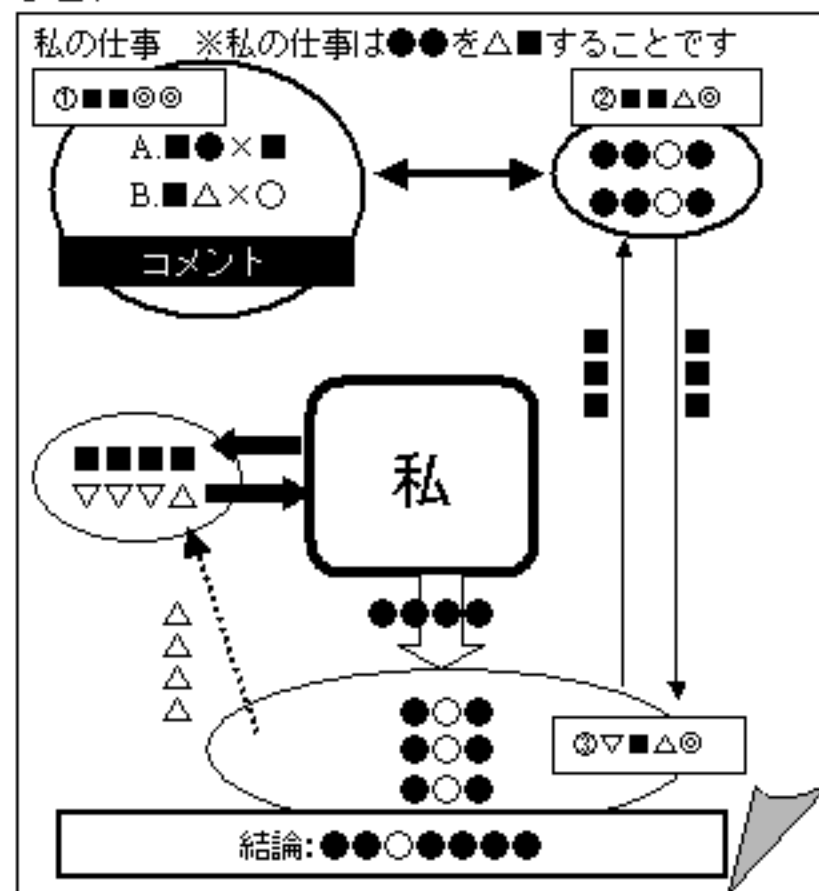
段階7:

誰に(自分も含む)どんな情報を、どの程度提示するかによって情報量や内容を吟味する

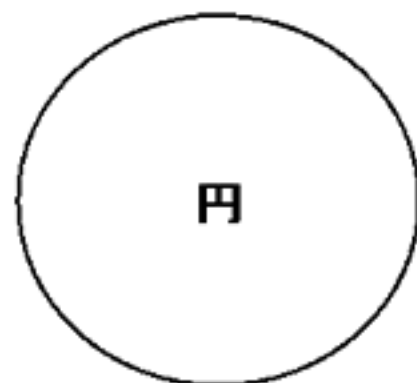


段階8:

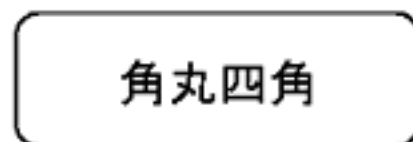
見やすく分かりやすくするためにいろいろな工夫を試みる(タイトル、見出し、番号など)



・図形の意味



イメージ
... 概念そのもの
集合体、集合群
和、積など



イメージ
... 標題
吹き出し
要素の一部
差、除など



イメージ
... テキストボックス
概念、課題、結論など



イメージ
... 強調、欄外
その他恣意的な用途
形状的な特殊効果など
(例: 矢印の代用など)

・マルの使い方 レイアウトの方法①(関係・位置・構造を表わす)

基本的なマルの組み合わせ

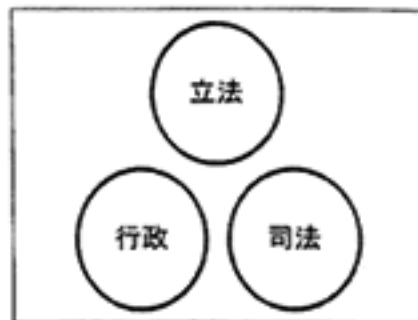
1 並列

2つのマルを並べて、2つの物事の関係を表す。この例ではアメリカの二大政党制の拮抗した状態を表している。マルの大きさを変えると、大きさの比較を表すことができる。



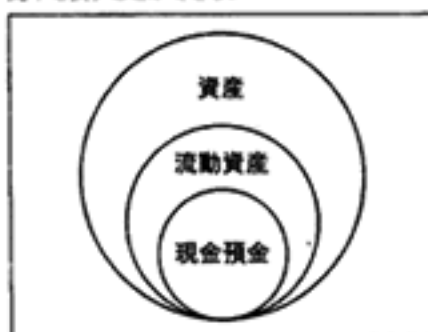
2 分離

マル同士が離れているのが分離関係で、互いに独立した関係を表す。この例では三権分立の互い同士が等距離に離れ、バランスがとれていることがわかる。



3 包含

物事の上位概念と下位概念、数学の集合の関係を表す。この例のように、大きいマルが小さいマルを含んでいる構造では、大きさを変えると、比率を表すことができる。



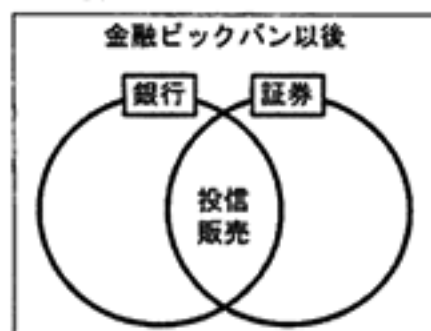
4 隣接

各キーワードが接点を持ちながらくっついている構造。この例ではビックバン以前の金融業界が重なり合わずに、隣接している状態を表している。



5 交差(重なり)

マルが交差して重なっている構造。重なる部分を省略することで、マル同士の関係が明らかになる。重複、集合、合同などの関係を表すことができる。



6 集合・群立

マルが集合して群れをなしている構造。例として親会社と関連会社といった企業グループの関係を示す。マルの大きさを変えると、全体の比率をひと目で把握することができる。

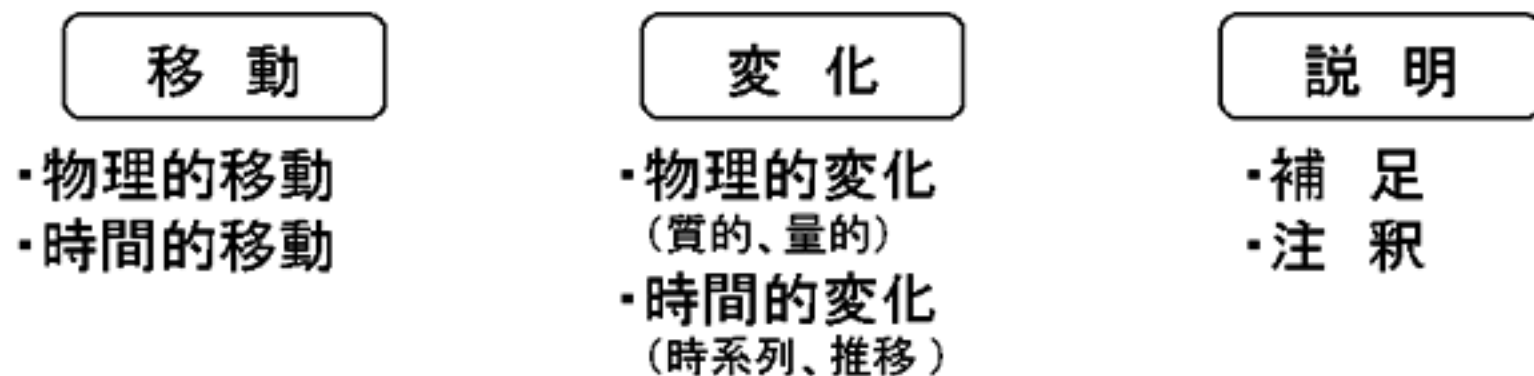


・矢印の意味

矢印自体の持つ記号的意味

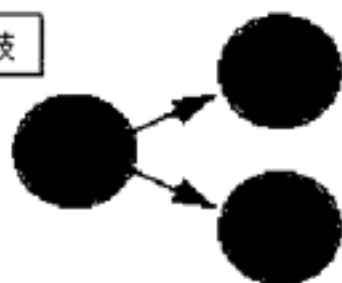


矢印に含まれる記号的意味



・矢印の使い方(動き・流れ・方向・関係を表わす)

分岐

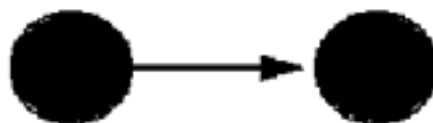


因果



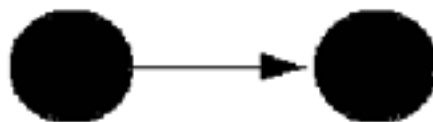
ゆえに、そこで、それで、したがって

順接



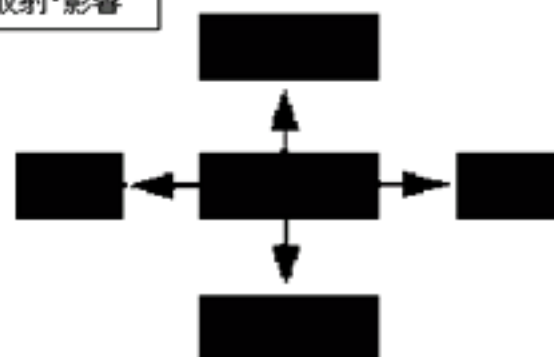
そして、それから

逆説



だが、しかし、けれども、ところが

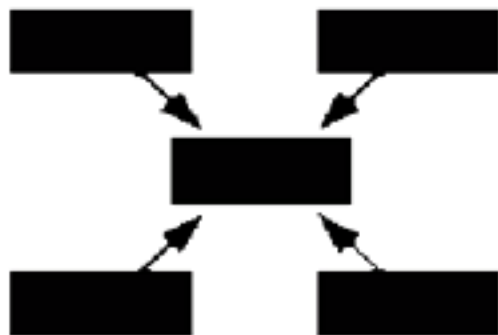
放射・影響



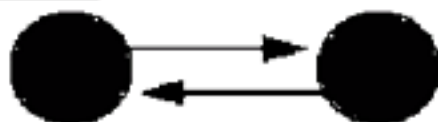
分類



収斂



因果関係



対立



・矢印の使い方 実例（動き・流れ・方向・関係を表わす）

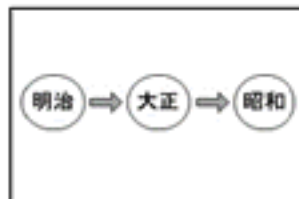
覚えておこう

これらの矢印の使い方を覚えていれば、物事の関係はほとんど表現できる。マルを使って構造を作ったら、どの矢印の使い方が適当かを考えながら作成してみよう。

基本的な矢印の使い方

1 連続性(直線)

矢印で、AからBへ、BからCへという連続的な流れを表す。図解でも多く使われるのがこの連続性の矢印。因果関係や時間的な連続性がある場合に用いる。



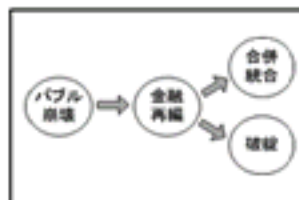
2 連続性(サイクル)

このビジネスコミュニケーションのプロセスのように、連続性をサイクルで表すこともできる。「理解」から「企画」そして「伝達」へ。さらに「伝達」から「理解」へと再び戻ってくる。



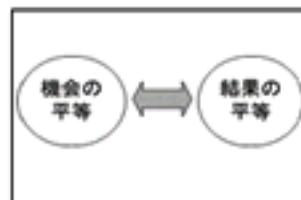
3 範囲の展開

矢印によって、範囲の展開を表すことができる。この例ではバブル崩壊が金融再編を促し、その結果、銀行の行く末が2つの方向に展開していく様子を表している。



4 対立

矢印の始点と終点の両方の概念に矢印を付けて、物事の対立を表している。この例では、機会平等と結果平等を対立した概念として表現している。



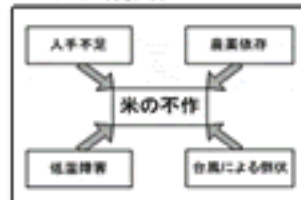
5 双方向性

2本の矢印を逆向きで水平に並べると、双方向性を表現できる。この例では企業と顧客の関係を双方向性で表している。コミュニケーションに関してよく使われる。



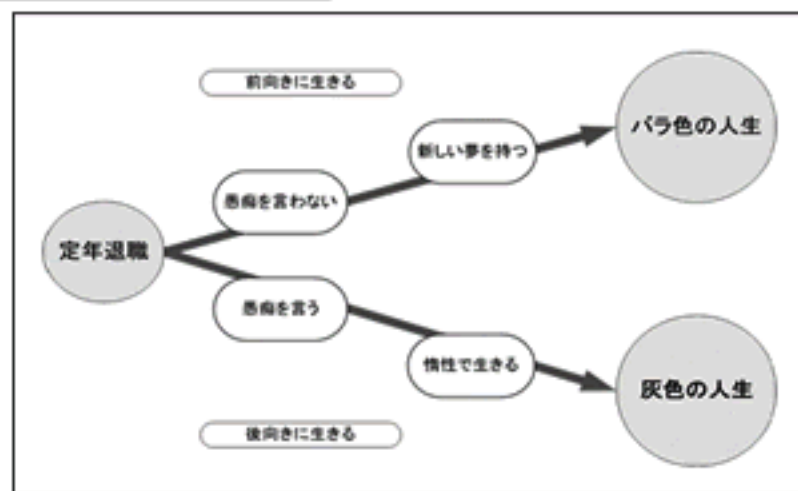
6 収斂

周囲から中心に向かった矢印を使うことで、収斂を表現している。この例では「米の不作とその原因」のように、複数の原因から1つの結果が生み出れるときなどに使用する。

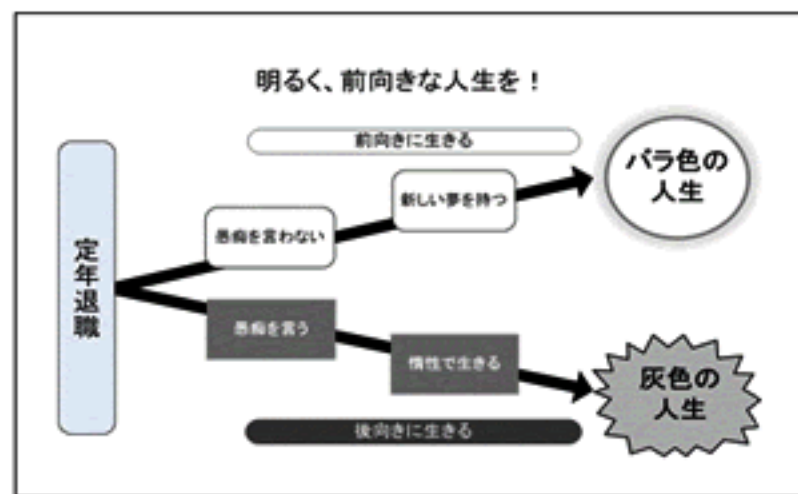


図解のテクニックで図解を発展させる

基本形で考える

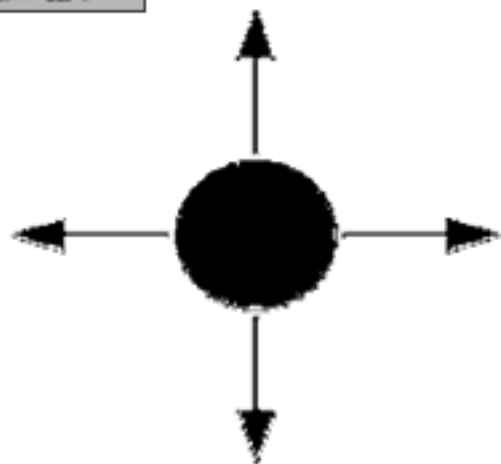


マルを使い分ける



・広がり感覚のパターン図

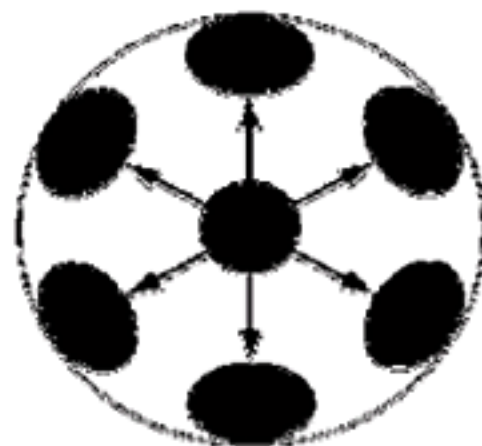
拡散1



拡散2



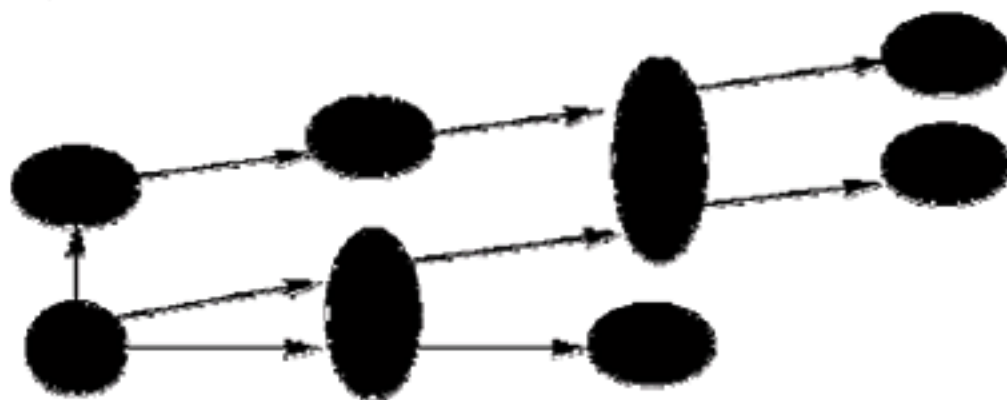
拡散3



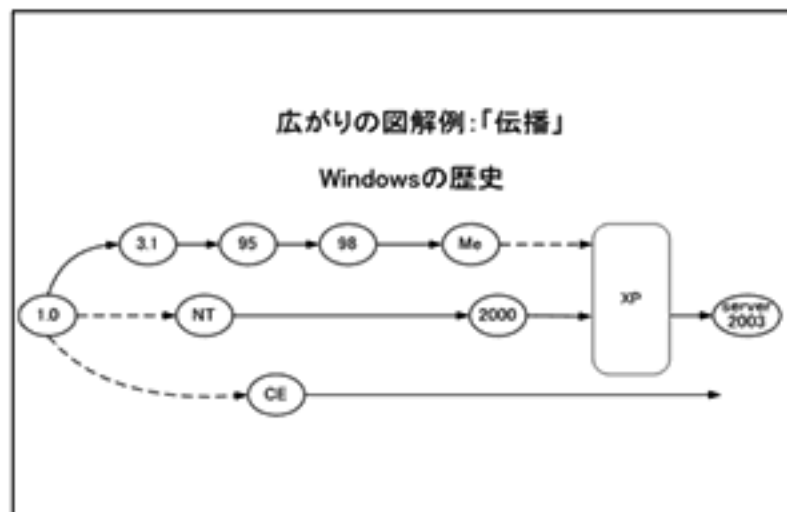
分散



伝播

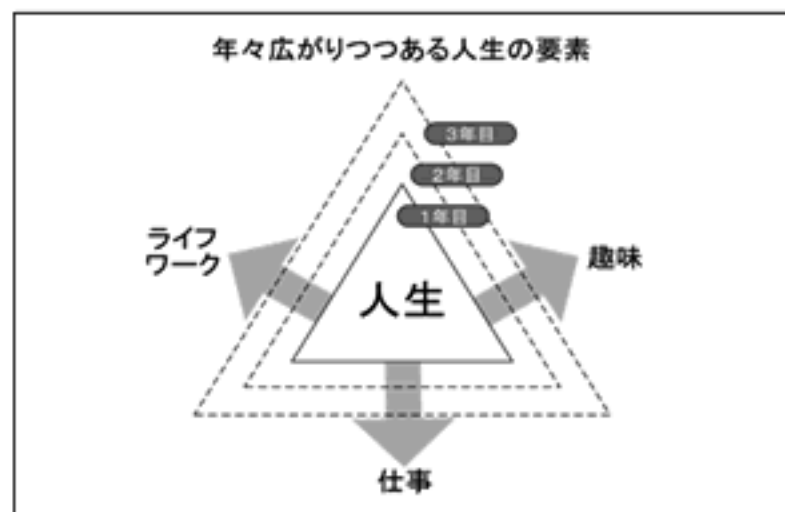


・広がり感覚のパターン図 実例



■「広がり図解例」:「伝播」

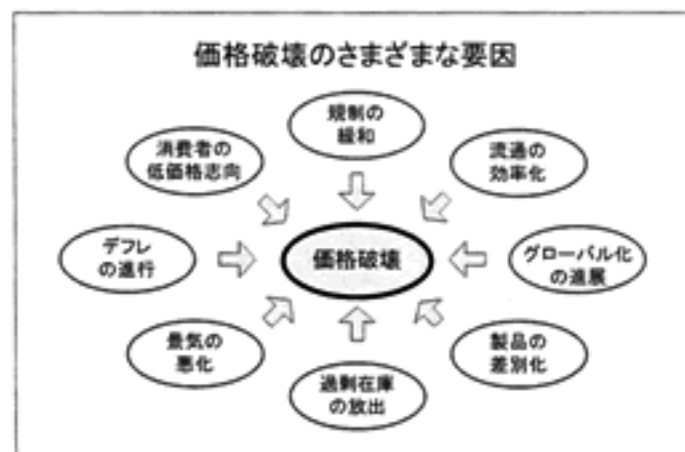
「伝播」は、さまざまな系図や何段階もの因果関係を現す場合に適している。この図解例は、Microsoft社のOSであるWindowsが体系的に枝分かれし、それぞれがバージョンアップしていく様子を左から右に時系列で表している。



■「広がり図解例」:応用例

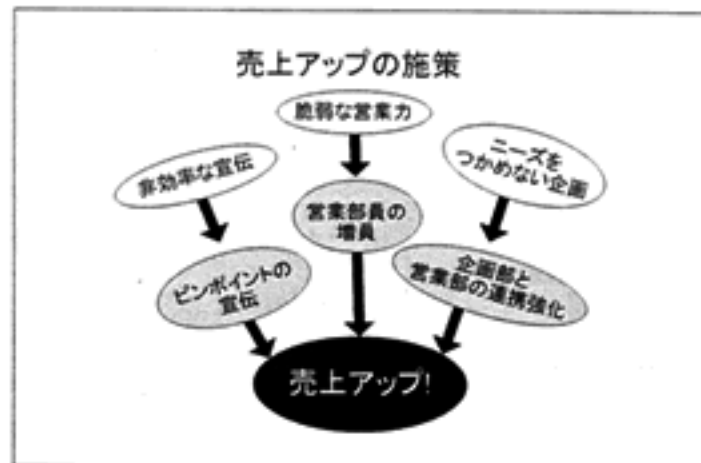
この図解例は、「拡散」、「分散」、「伝播」などの基本的な「広がり」図解の応用例である。人生が「ライフワーク」、「仕事」、「趣味」でどんどんと広がっていく様子を表している。

・縮まり感覚のパターン図 実例



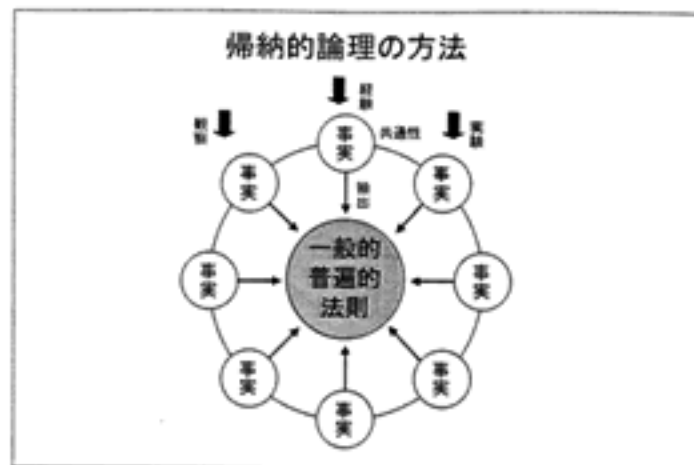
■(縮まりの図解例):「集中①」

「集中」は、その名のとおり、物事が中心に向かって集中する状態を表す。この図解例は、「縮まり」図解の典型で、周囲から中心のキーワードに向かって矢印が集中し、複数の問題が価格破壊を生み出していることを表している。



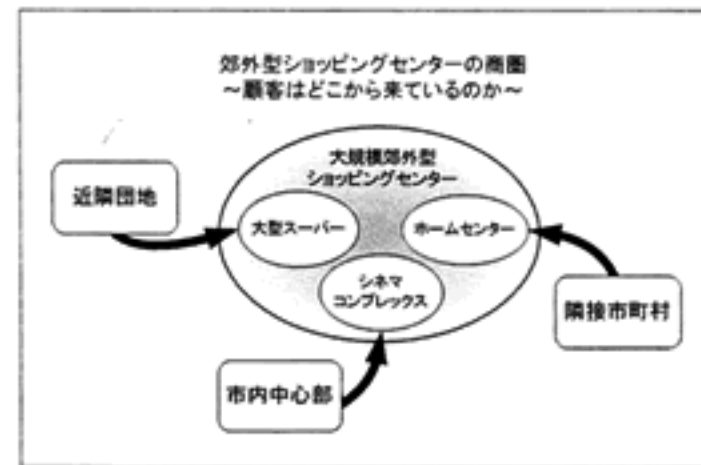
■(縮まりの図解例):「集中②」

「集中」は、半同心円状にして問題点などを段階的に表すことができる。この図解例は、中心の「売上アップ!」に向かって、その方策を配置し、またその外側に現状を配置している。現状とその改善策が、目標の売上アップにつながることを表している。



■(縮まりの図解例):「集中③」

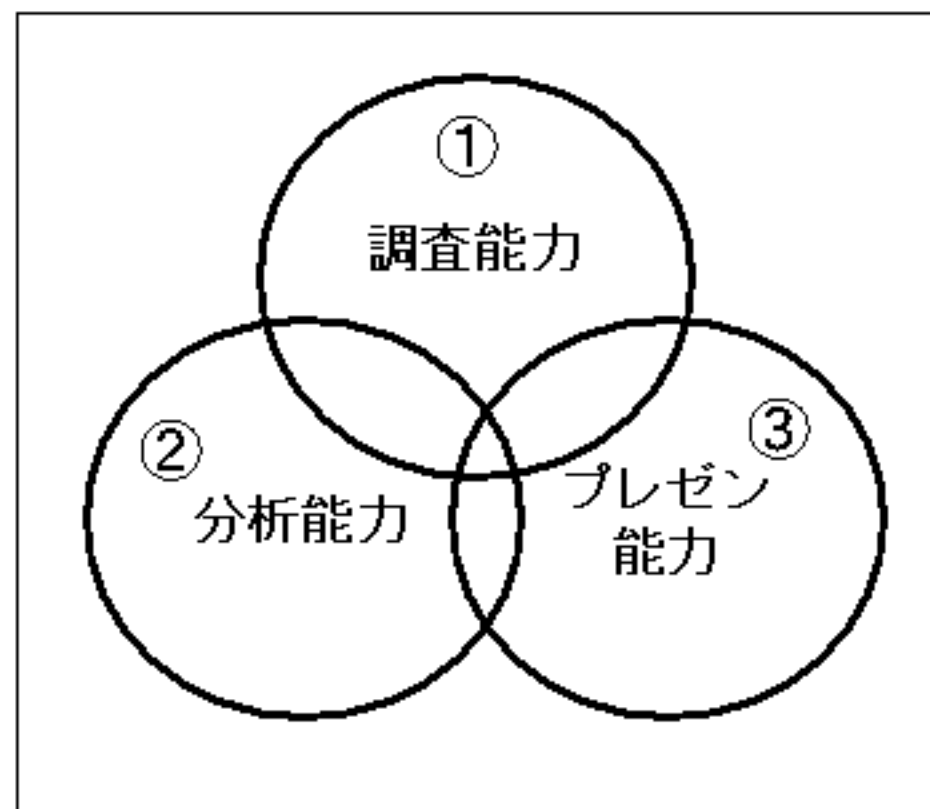
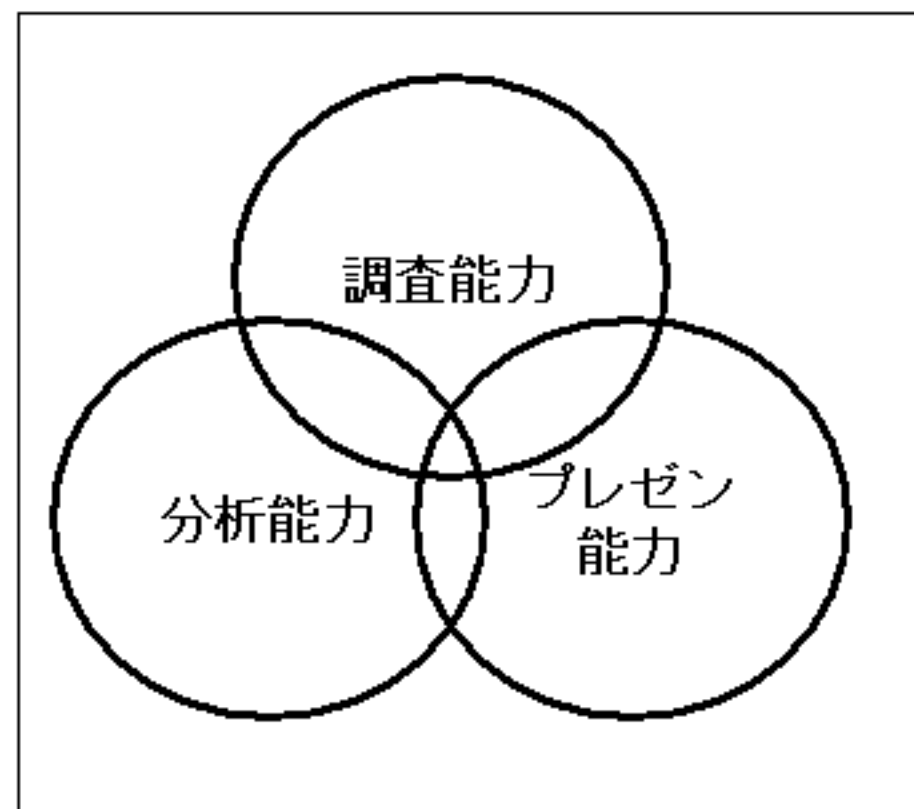
この図解例は、P.54で紹介した「帰納法」をさらに詳細にしたもの。観察や実験などで集めた多くの経験的事実から、それらに共通する部分を見つけ出し、普遍的な法則を求めていくという思想で、「集中」を用いて図解すると一目瞭然となる。



■(縮まりの図解例):「吸引」

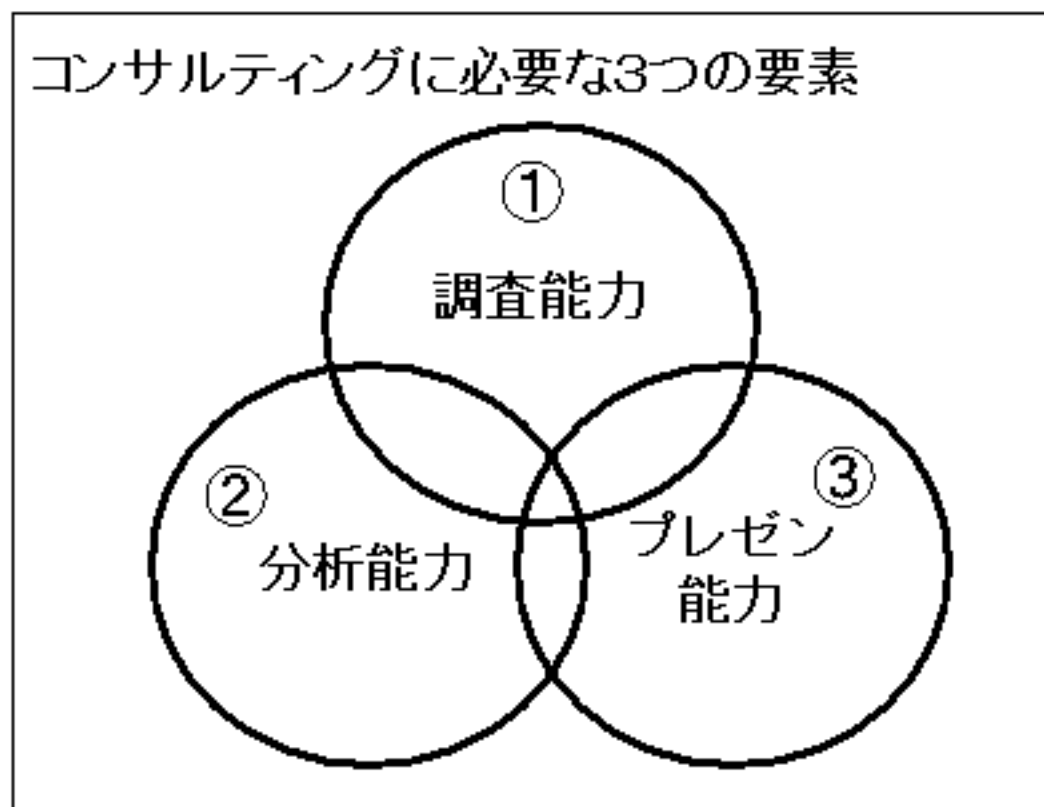
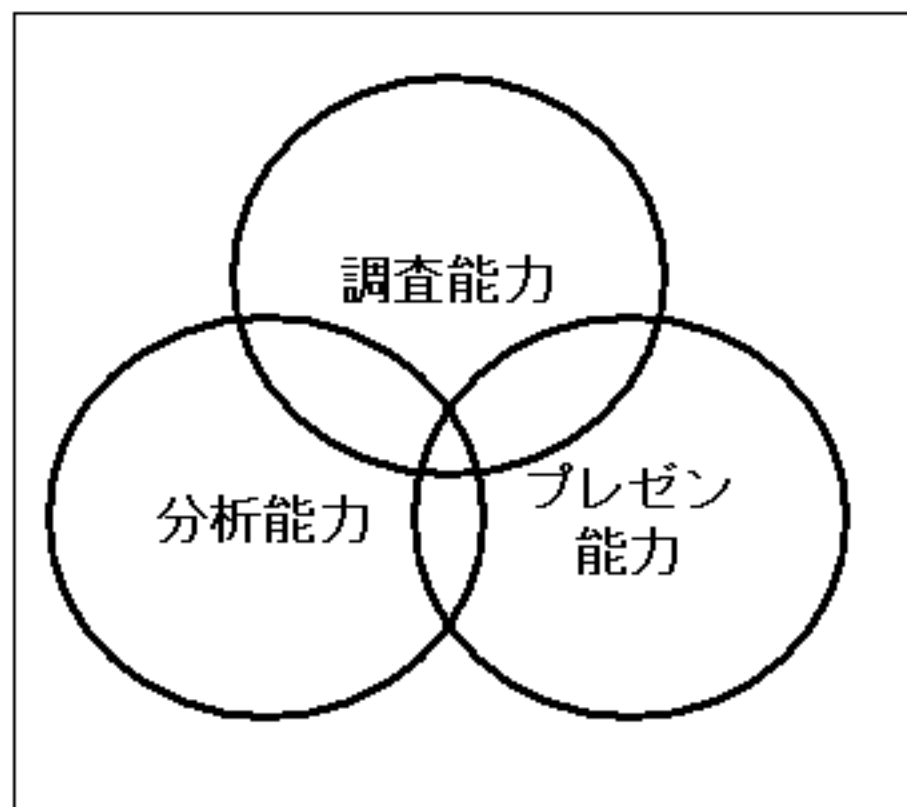
「吸引」は、矢印にカーブを付けることで図解自体に動きを出し、まるで中心のキーワードに向けて引き込まれていくような見せ方ができる。この図解例は、郊外型のショッピングセンターに、どこから顧客が来ているのかという現状を表している。

・図解を描く① アイコントロール



図解を見やすく分かりやすくするためには
なんらかのガイドを設ける必要がある

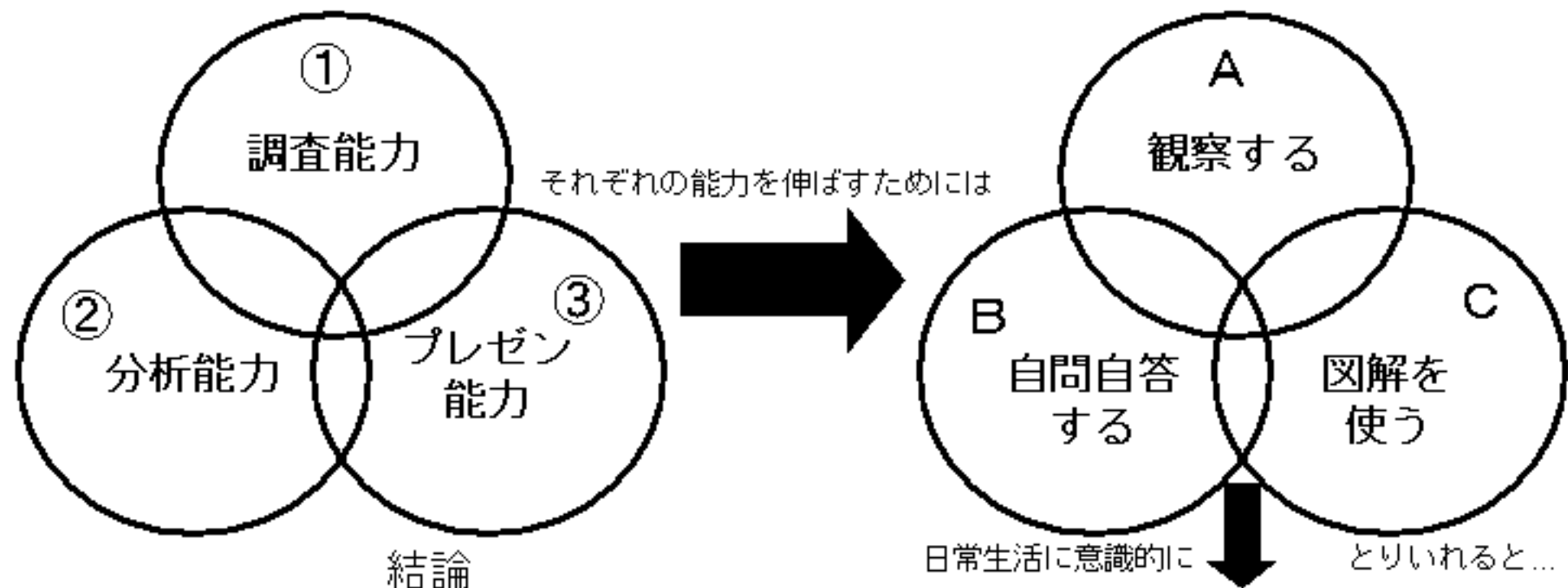
・図解を描く② タイトル



何の図解が分かれば、内容に対する理解度が上がり、納得感が高まる

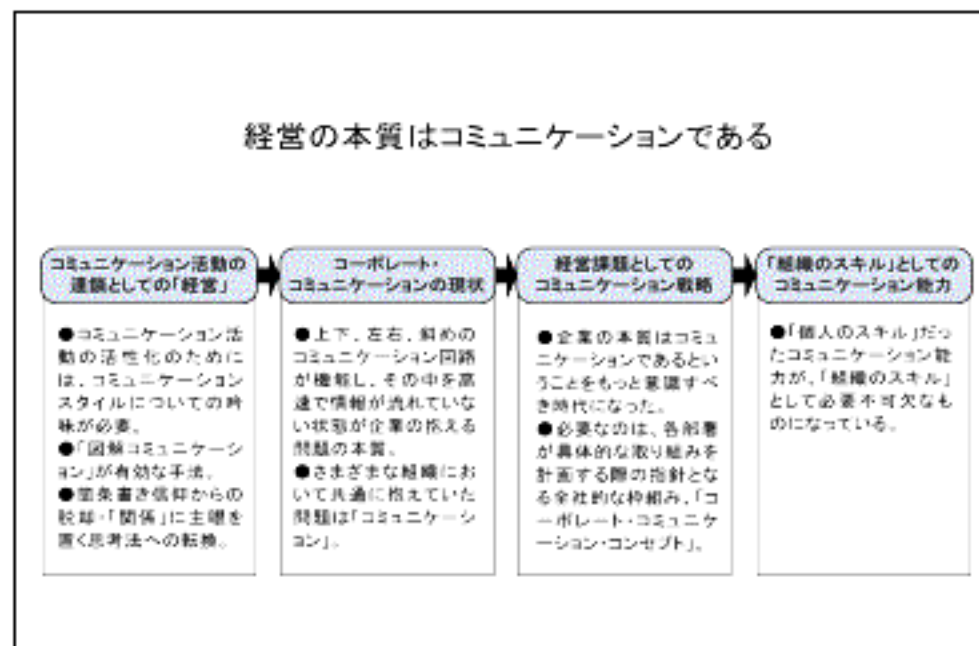
・図解を描く③ 結論(コメントの付け方)

コンサルティングに必要な3つの要素を伸ばす方法



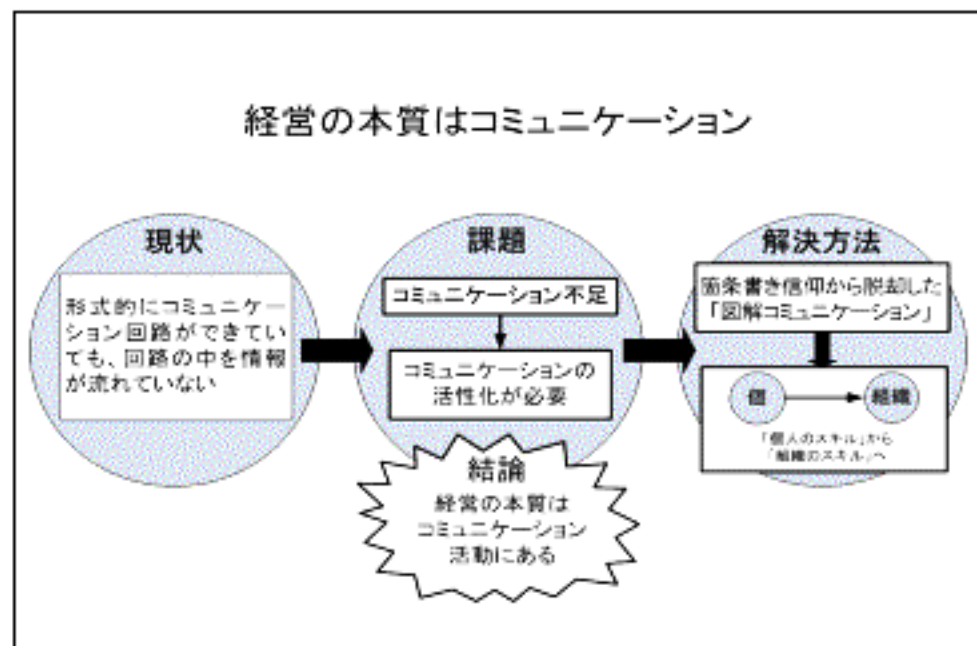
普段から、A、B、Cの点に留意し意識的に訓練することで、コンサルタントとしての能力が開発される。

・文章を図解にする②



■箇条書き思考の骨格図

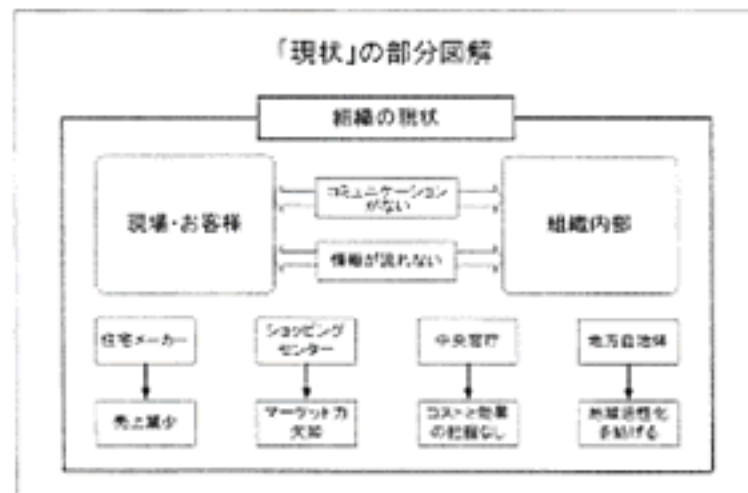
文章からキーワードを抜き出し、中見出しをそのまま使って骨格を作ったつもりになっているが、キーワードは箇条書きのままである。箇条書き思考は止めて、キーワード同士の関係を考えながら骨格を組み立て直す必要がある。



■結論と論拠を意識した骨格図

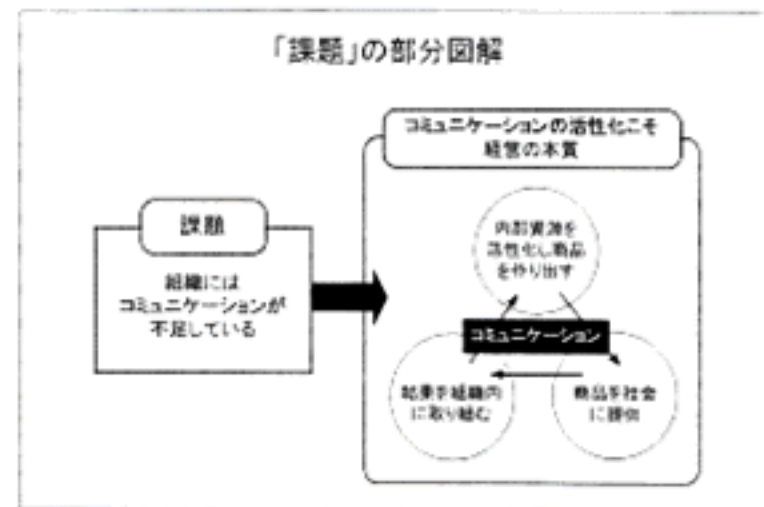
「現状」から「課題」を導き出し、「結論」を生む流れで表している。また、その結論を補足する具体的な「解決方法」も骨格に入っている。

・文章を図解にする③



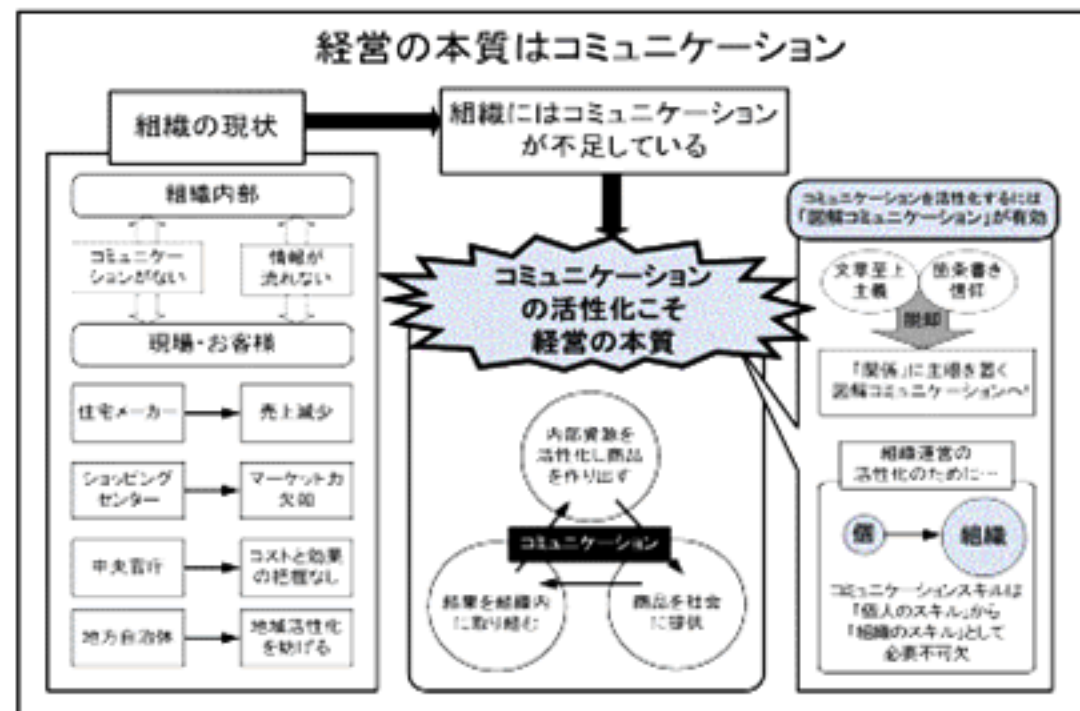
■部分図解を作る

前節の「結論と論拠を意図した骨格」の図解例を利用して、骨格のブロックごとに部分図解を作っていく。まず、骨格の左側「現状」の部分を図解し、ビジネスマン時代と大学教授時代の経験でわかったことをまとめている。



■流れを意図して部分図解を作る

次のブロックは、中心の「課題」部分を図解する。この部分が今回の課題文章全体の結論にもなっている。前節の図解例ではギザギザの枠で括られていた「結論」は、3つのコミュニケーションの流れで具体的に表している。



■組み上げて全体を仕上げる

「解決方法」の部分を図解し(右側の図)、すべての部分図解を組み上げる。その後、全体のバランスを見ながら、矢印やマルの形を整えて結論を強調する。最後に骨格と見比べて図が豊かになり、より良くなったかどうかを確認して完成となる。